つながる！はじまる！ボランティア体験講座
～CLUB E.V.O.～

４つのＥ＜Education、Ecology、Evolution、Ehime＞をキーワードとして研修を行い、地元に貢献できるボランティア活動について考える機会となりました。
また、コミュニケーションの大切さについて再確認できました。

１　事業実施までの経緯

「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」（中央教育審議会答申、平成１４年７月２９日）を踏まえ、青少年にボランティア精神を普及し、生涯を通じて様々な場面でボランティアとして活躍できる人材を育成する重要性は従来から指摘されている。また、当機構本部の法人ボランティア制度が制定されている。本事業では、そのカリキュラムに基づき、ボランティア自身が事業の企画・運営計画を立て、実施することによって、事業を運営するために必要な知識と技能を体験から学ぶことをねらいとし、主体的に行動できる人材育成につながるよう企画した。さらに、今回の事業により国立大洲少年交流の家をボランティア発信の拠点の一つとして位置づけ、様々な施設で活躍するボランティアの交流の場となるような足がかりとなるように展開したいと願い、本事業を実施した。

２　ね ら い

青少年教育におけるボランティア活動に必要な基礎的な知識・技術等を習得するための研修を行い、生涯を通じて地域や様々な場面において主体的に行動できる態度を育成する。

３　主　　催　独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立大洲青少年交流の家
４　後　　援　愛媛県教育委員会・大洲市教育委員会
５　期　　日　平成２１年５月２３日（土）～２４日（日）【１泊２日】
６　場　　所　国立大洲青少年交流の家
７　参加人数　２７名（募集人数３０名）
８　講　　師　菊間　彰 氏（よろず体験事務所　をかしや代表）
国立大洲青少年交流の家　職員・法人ボランティア

９　日　　程

□５月２３日（土）

10:45　11:10　11:30　12:30　13:30　15:00　18:00　19:30　20:30　22:30

受付	開講式	アイスブレイク	昼食	講義Ⅰ・演習 ボランティア観をつくろう	実習Ⅰ 救命救急法	夕食 入浴	講義Ⅱ ボランティアを考えよう	自由交流	就寝

□５月２４日（日）

6:30　9:00　12:00　13:00　14:30　15:00　15:30

起床 つどい 朝食	準備	実習Ⅱ 自然体験活動の知識・技術 ①インタープリテーション(自然解説)実習 ②カヌー実習　☆どちらかを選択	昼食	実習Ⅲ コミュニケーションを学ぼう	連絡	閉講式	解散

10　活動内容

国立大洲青少年交流の家では、高校生、大学生、専門学校生、社会人等の青年を対象にボランティア養成事業を行っており、年度当初（例年５月に実施）にスタートアップセミナーとして「つながる！はじまる！ボランティア体験講座」を、独立行政法人国立青少年教育振興機構における法人ボランティア養成共通カリキュラムに基づく１３時間（「青少年教育の理解」「ボランティア活動の意義」「活動スキル」など）の内容で実施している。

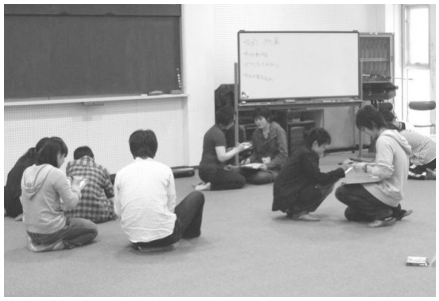
青少年教育におけるボランティア活動に必要な基礎知識・技術等を習得するための研修を行い、生涯を通じて地域や様々な場面において主体的に行動できる力を身につけることをねらいとしており、今年も５月２３日・２４日に１泊２日の日程で行った。

開講式の後は、参加者同士が交流できるようにと先輩ボランティアが主導して進めたアイスブレイクで、参加者は緊張した面持ちから笑顔に変わっていった。その後、救命救急法や野外活動中に起こりうる事故の対応について学び、安全管理の大切さを学んだ。活動スキルにおいては、当施設でメインの研修プログラムになっているカヌー実習と施設内のフィールドを使った自然観察インタープリテーション実習の２つに分かれて活動を行った。初めての体験に参加者は興味しんしんで、講師や先輩ボランティアの指導の下、様々な技術を伝授してもらい、次は自分達が指導する立場になることに思いをはせ、ボランティア活動に対する意欲がさらに高まったようである。

（１）アイスブレイク

講師　国立大洲青少年交流の家　職員および法人ボランティア

初対面の参加者に対して、これから和やかに交流できるように最初にアイスブレイクを実施した。１時間ほどのゲームを取り入れることで､緊張した心をときほぐす時間となった。講師は国立大洲青少年交流の家の職員と法人ボランティアが担当した。



（２）講義Ⅰ・演習「ボランティア観をつくろう」

講師　国立大洲青少年交流の家　次長 國府修治

講義では、ボランティア活動の意義と今日的役割からはじまり、ボランティアの歴史および日本でボランティア活動が行われるようになった背景、ボランティア活動の現状（いろいろなボランティア活動）などを知ることができた。参加者もこれからボランティア活動を行う上で、ボランティア活動の心がまえとボランティアリーダーとしての役割を理解した。

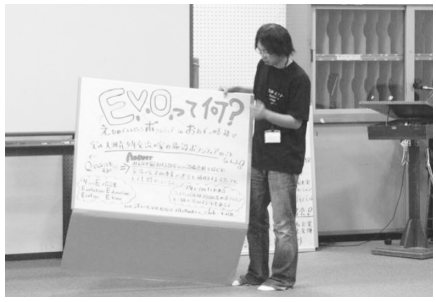
（３）実習Ⅰ「救命救急法」

講師　大洲消防署員

救命救急に必要な知識・技術を学んだ。”もしも”の時にしっかりと対応ができるように、心肺蘇生法とAEDの使い方、ケガの応急処置法などを実習した。参加者は３時間の講習を修了し、『普通救命講習修了証』を受け取った。

（4）講義Ⅱ「ボランティアを考えよう」

講師　国立大洲青少年交流の家　職員・法人ボランティア



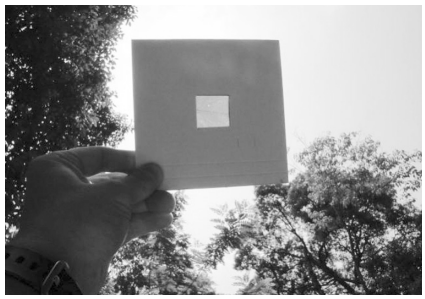
青少年教育施設におけるボランティア活動の内容を理解した。当施設のボランティアは「CLUB　E.V.O.」として活躍している。E.V.O.とは、『愛媛でええじゃろボランティアいん大洲』の略称で、E.V.O.の”E”には、「Evolution-進化-、Ecology-環境-、Education-教育-、Ehime-地元愛-」という４つの意味も込められている。この４E（良い）ことを柱にE.V.O.は様々な活動をしている。参加者は先輩ボランティアの活躍を熱心に耳を傾けていた。

（5）実習Ⅱ「自然体験活動の知識・技術」①か②のどちらかを選択

各教育拠点の特性に応じたプログラムに対応するための知識・技術等を学ぶ。

①インタープリテーション（自然解説）の手法を学ぶ

講師　よろず体験事務所　をかしや代表　　菊間　彰 氏



”インタープリテーション”とは何かをプレゼンテーションを使って説明を受け、実際に施設内のフィールドを使って「五感」「体験」の大切さを学んだ。自分のお気に入りの木の葉を台紙に挟み込んだ「リーフスライド」を全員でみたり、グループ実習では、『気に入った自然と、オススメポイントを伝えよう』という題で、ネタを考え、実際に発表をした。

”見えるものを通じて見えないものを伝える”という難しい部分もあったが、まず自分の言葉で伝えてみるという本質の部分など、奥の深さを感じることができた。

振り返りでは、「どれも自分にとっては新しいことばかりで興味深かった。」「いろいろな見方があって、それぞれの感性を感じた。」などの意見も出された。

②肱川でのカヌー実習

講師　国立大洲青少年交流の家　職員

カヌーは当施設で最も人気の高いプログラムとなっている。操作技術や指導技術を身につけるとともに危機管理意識も高め、カヌー事業のボランティアとしても活躍してもらいたい。

（6）実習Ⅲ「コミュニケーションを学ぼう」

講師　よろず体験事務所　をかしや代表　　菊間　彰 氏

この実習Ⅲでは、ボランティアにとって必要不可欠であるコミュニケーション能力の向上を図るための講義やトレーニングを実施した。中にはプロジェクト・ワイルドの技法を用いたプログ

ラムなど、参加者にとっても初めての体験で、楽しい中にもいろいろと考えさせられる内容に奥の深さを感じていたようだった。また、ふりかえりでは自分の感じたことや思いを発表し合うことで、全体で共有化したものとなり、「自分のボランティア観」もそれぞれが創っていった。

本事業で学んだことを学校や地域での活動に、ぜひ生かしてもらいたい。

11　参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

＊ 満足：77.8%　＊ やや満足：22.2%　＊ やや不満：0.0%　＊ 不満：0.0%

○すごく充実していて、快適な時間を過ごせた。

○初めてボランティアの事業に参加して、本当によかったと思う。また、時間があれば参加してみたいです。

○新しいことや、勉強になることばかりだったから良かった。

○あまりやらないことなのでいい経験になった。

○知識だけじゃなく、体験もたくさんあった。

○一日のみの参加でしたが、とてもおもしろかったです。”見えるものを通して見えないものを伝える”ということに気づくきっかけをいただきました。ありがとうございました。

12　成　　果

ボランティア養成１３時間分のカリキュラムの中では、当施設をより身近に感じてもらうために、体験活動の内容ではカヌー実習と自然観察の選択制とした。どちらのコースの参加者も興味を持って体験してくれ、また参加してみたいという思いを持ってくれたことは大変うれしいことである。

また事業では、経験豊富な講師や当施設で活躍している登録ボランティアがサポートしてくれ、参加した高校生や大学生などは、ボランティアの大切さや素晴らしさを身近に感じることができていた。参加者はボランティア活動に対する前向きな考えを持っている。これから活動するにあたって、よいきっかけづくりになったのではないかと考えられる。

13　課　　題

ボランティア養成研修を終えた新たなボランティアが法人登録しているが、当施設で活動するボランティアは同じメンバーであることが多い。”先輩ボランティアから後輩ボランティアへ”という引継ぎをしていかなくてはならないと考えている。また、ボランティアたちが学んだことを活かせるように、実際に子どもたちとふれ合うことのできる機会の場を提供していくことが必要である。「より自分たちのスキルアップを目指していきたい」「他のボランティアグループとの交流などをすることにより、自分たちの意識改革につなげていけるように実践していきたい」という声に答えいくことも必要である。